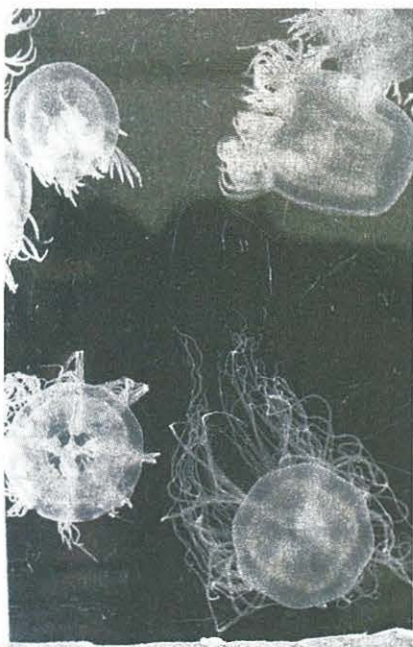


カミクラゲ



2004年2月に瀬戸漁港で
採集されたカミクラゲ

(白浜町臨海で)

久保田 信

11



前回紹介したイボクラゲなど大型の鉢クラゲと比べてヒドロクラゲ類のほとんどは傘の大きさが数センチほど、肉眼で見つけられないほど小さなものも多い。しかし、カミクラゲはヒドロクラゲ類でありながら、縦長の箱型の傘を持ち、高さ10センチにも達するほど異例な大きさである。

カミクラゲは、日本産の無脊椎動物の中ではとりわけ古い時代に新種として紹介された歴史的な生き物である。1818年にチレシウスが命名したのだが、彼がロシア軍艦ナデジダ号で来日した1804年に長崎港で採取した個体が基である。採取後から2世紀にわたって、日本だけし

1属1種で、4本ある放射水管が多数の枝を出して樹枝状になることや、コイル状に垂れ下がる生殖巣を持つなど、独特の複雑な形態をしている。傘の縁には8群の触手がある。おのおの触手の根元に赤い眼点が1個ずつあり、それで光の強弱を感じてうまく浮沈する。

か知られていないクラゲだったが、最近、韓国でも生息しているのが確認され、日本特産ではなくなった。

よく成長したクラゲが、たまたに田辺湾に出現する。今年も2月にそのような個体が白浜町の瀬戸漁港で漂っているのを目撃した。その時網を持っていなかったので、すぐに研究室へ取りに戻った。わずか10分程度なのだが、すでに岸壁から遠く離れており、採集することができなかった。流れのままに漂うプランクトンなので致し方ない。

2000年以上前から知られているカミクラゲだが、若い時代のポリプが、どこにどのような姿でくらしているのか、いまだに謎のままである。実験室で雌雄を交配させて得たブナクラ幼生は、なぜか飼育容器へ付着せずに消滅してしまふ。他生物との共生など特殊な生活をしている可能性がある。(京都大学准教授)